『歎異抄』のおはなし⑮第十二条（1）
学問と信心

今回の第十二条は長いので、3 回に分けてお話します。
『歎異抄』前半の「師訓編」に比べると、後半の「異義編」は、長いです。

この第十二条では、学問と信仰の関係がテーマです。
往生のためには、学問は不要であることが説かれています。
そして「学問をしない人は、いくら念仏しても救われない」という異義を主張する人々に対する批判が述べられています。

◎勉強しない人は浄土に生まれない？

「経釈をよみ学せざるともがら、往生不定のよしのこと、この条すこぶる不足言の義といひつべし。」

「経釈」とは、仏教の経典と、七高僧等が書かれたその注釈書のことです。
「往生不定」というのは、浄土に生まれるかどうかはっきりしないことです。
「すこぶる」は、少しばかり、かなり、という意味で、少し、と多い、甚だしい、の二つの意味を持つ言葉です。
「不足言」とは、言うに足らないこと、つまらない考えのことです。

現代語訳は以下の通りです。

（現代語訳）
〈経典や祖師がたの書かれた注釈書を読んで勉強することのない人々は、浄土に往生できるかどうかわからないということについて。これは、論じるまでもない誤った考えといわなければなりません。〉

◎「本願を信じ念仏もうさば仏になる」ただこれだけ！

「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ念仏をまうさば仏になる、そのほか、

なにの学問かは往生の要なるべきや。」

「他力真実」とは、他力の真実すなわち阿弥陀仏の誓願に基づく救済のことです。
「むね」は、趣旨を意味します。
「聖教」というのは、仏教の経典や、高僧・祖師の書いた著書のことです。
「なにの学問かは往生の要なるべきや」とは、どんな学問が往生のために必要であろうか、いや必要ではない、という意味です。

（現代語訳）
〈他力救済の真理を明らかにした聖教にはすべて、阿弥陀仏の本願を信じて念仏すれば必ず仏になるということが示されています。浄土に往生するために、この他にどのような学問が必要だというのでしょうか。〉

阿弥陀如来の本願を説いた諸々の聖教は、他力の救済について説いているのですが、それは「本願を信じ念仏を申さば仏になる」ということを明らかにしています。
これは浄土真宗の教えを一言で簡潔に、端的に表わした、昔から有名で大事な言葉です。

そしてこの「本願を信じる」ことと「念仏をもうす」ことによって「仏になる」、これだけで十分だ、この他に学問は必要ない、ということです。
そして第十一条で拝読しましたように、本願と念仏とは切り離すことができないのです。

学問だけでなく、戒律や禅定、その他の厳しい修行も、往生の条件としては必要ないのです。
もし学問や戒律や厳しい修行が往生のために必要であれば、阿弥陀仏が誓われた「すべての人を等しく救う」という願いは、果たされることがありません。

◎学問の目的は本願の道理を知ること

「まことにこのことはりにまよへらんひとは、いかにもいかにも学問して、本願のむねをしるべきなり。」

「ことはり」というのは、道理のことです。
「まよへらん」は、迷っているであろう、という意味です。
「いかにもいかにも」とは、なんとかして、ほかのことはどうであろうと、ということです。

（現代語訳）
〈本当に、この道理がわからないで迷っている人は、徹底的に学問をして、本願のお心を知るべきです。〉

本願を信じ念仏申さば仏になるということを理解できず、あるいは間違って受け取っているとしたら、そのあたりを間違えないようにするために、学問をするのです。

往生を目的として学問があるのではありません。
学問はまったく必要ないというのではなく、「本願を信じ念仏を申さば仏になる」ということが本当にわかるようになるためにするものであり、今まで信じられなかった阿弥陀仏の本願が信じられて、念仏が申されるようになるために学問をするのです。
しかし学問では救われないのであり、あくまでも信、すなわち如来の本願を信じる心で救われるのです。

「経釈（きょうしゃく）をよみ学（がく）すといへども、聖教（しょうぎょう）の本意（ほんい）をこころえざる条（じょう）、もとも不便（ふびん）のことなり。」

「本意」というのは、本来の意味ということです。
「もとも」は、全くいかにも、至極当然に、という意味です。
「不便」とは、いたわしいこと、不憫（ふびん）・かわいそうに思うことです。

（現代語訳）
〈しかし経典や祖師がたの注釈書を読んで学ぶにしても、その聖教の本当の意味がわからないのでは、何ともかわいそうなことです〉。

どれほど経典や論釈を読んで学問をしても、その経典の本意がわかっていなかったら、本当に気の毒だというのです。
学問は、本願のお心を間違って受け取らないようにするためにするべきものです。

◎文字が読めない人でも称えやすい名号＝易行

「一文不通（いちもんふつう）にして経釈のゆくぢもしらざらんひとの、となへやすからんための名号（みょうごう）におはしますゆへに、易行（いぎょう）といふ。」

「一文不通」というのは、以前にも出てきましたが、文字一つ知らず、無学・無知であることです。

「ゆくぢ」は、行く路、筋道のことです。
「易行」というのは、修しやすい行のことで、本願を信じて念仏することです。「難行」に対する言葉です。

（現代語訳）
〈文字の一つも読み書きできず、経典や注釈書の筋道もわからない人々が、容易に称えることができるための名号ですから、念仏を易行というのです。

無学で文字も読めず、経釈もよくわからない人が称えやすいようにと工夫して編み出してくださった南無阿弥陀仏の名号ですから、このような人のために、この教えはあるのです。
お経や注釈書を読んでも聞いてもわからないという人であっても助けたいというのが、大慈大悲の本願です。
そういう人でもたやすく称えることができる、そのための名号ですから、易しい行、易行というのです。
いつでも、どこでも、誰でもすることができる易しい行なので、「易行」というのです。

◎誤って勉強すると来世の往生は疑わしい

「学問をむねとするは聖道門（しょうどうもん）なり。難行（なんぎょう）となづく。あやまて学問して名聞利養（みょうもんりよう）のおもひに住（じゅう）するひと、順次（じゅんじ）の往生いかがあらんずらんといふ証文（しょうもん）もさふらふぞかし。」

「聖道門」は「浄土門」に対する語で、厳しい修行をしてさとりをめざす自力の道なので、「難行道」ともいいます。
「難行」というのは「易行」に対する語で、修行するのが困難な、聖道門の自力の行法のことです。
「あやまて」は、誤って、間違って、という意味です。
「名聞利養」は、名誉と利欲・利益を追求する思いのことで、名誉欲と物欲です。
「順次の往生」とは、現在の命が終わって、次の浄土に生まれることを言います。
「証文」というのは、証拠となる文献という意味で、ここでは親鸞聖人が書かれた『末燈鈔』の第六通目を指します。

（現代語訳）
〈学問を主とするのは聖道門であり、難行といいます。間違って学問をして、それによって名誉欲や利益（りえき）を得ようという思いをいだく人は、この世の命を終えて次の世に浄土に往生できるかどうか疑わしいということの証拠となる文もあるのです。〉

学問を第一義とするのは、聖者の道、聖道門で、実際に行なうことが難しい、厳しい教えです。
これは自分の力で悟りを開き、自力で救われようというものです。
そして煩悩を自分の力でなくしていこうとするのです。

間違って学問して、名誉欲、財欲、金銭欲、物欲という思いにとらわれている人は、次の世の往生も当てにならないのです。

◎学解往生の異義―聖教を学ばないと浄土往生できない?!

学問がなければ救われないという異義は、学問や知識を条件として、それがなければ往生できないとしたわけです。
これは「学解往生の異義」といわれ、聖教を学ばない者は浄土に往生することはできないとするものです。
そしてこれに対して唯円房は、救われるためには学問など必要ないと批判しているのです。

ここで大事なのは、唯円房が批判しているのは学問そのものでは決してなく、学問というものを間違って勉強して、名誉欲や財欲を満たす手段にしてしまうことを批判しているのです。

信仰は、学問や知識ではありません。
しかし信仰は知識によって、いよいよ深められるのです。

本願念仏において学問が必要なのは、阿弥陀仏がどうして名号を作り出したのかという経緯や、名号の道理を明らかにしようとして、経典や注釈書を紐解いてみる、それがここで必要な学問です。
つまり、阿弥陀仏の本願とは何かを明らかにするための学問です。

◎愚者になりて往生す

「順次の往生いかがあらんずらんという証文」とは、親鸞聖人が書かれたお手紙を集めた『末燈鈔』の第六通目を指しています。

●『末燈鈔』第六通

「故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、確に承はり候ひし

上に、物も覚えぬあさましき人々の参りたるを御覧じては、「往生必定すべし」とて、笑ませたまひしを、見まゐらせ候ひき。文沙汰して、さがさがしき人の参りたるをば、「往生（は）いかがあらんずらん」と、確に承りき。今にいたるまで、思ひあはせられ候ふなり。」

「あさましき」とは、あきれる、見下げたくなるようにひどい、見苦しい、といった意味です。
「必定」というのは、そうなると決まっていること、必ずそうなると判断されること、必ず成仏すると定まること、という意味です。
「文」は学問、書物の意味です。
「沙汰」は、物事の善悪・是非などを論じ定めること、といった意味です。
「さがさがしき」は、いかにもしっかりしている、かしこい、賢明である、こざかしい、といった意味です。

（現代語訳）
〈今は亡き法然上人が、「浄土の教えを仰ぐ人は、愚者になって往生するのだ」と仰っておられたことを、確かにお聞きしています。その上、何もわからない無知な人々が来たのをご覧になって、「浄土に往生するのは間違いない」といって、微笑まれたのをこの目で見ました。学者ぶった、いかにも賢そうな人がやって来たときには、「あの人の往生はどうであろうか」と仰せになっていたのも、確かにお聞きしました。今にいたるまで、そのことが思いおこされます。〉

親鸞聖人のこのお手紙によれば、学問とは無縁な愚者こそが往生できるのであって、学問をして賢そうにふるまう人は、往生からもっとも遠いことになります。

法然上人が言われた「愚者」とは、「自分自身の愚かさをよく自覚した者」という意味です。
煩悩を捨てることができない愚者は、その身のままで阿弥陀仏の願いにおまかせして往生するのです。

◎愚者の仏道

愚者になって往生するということは、学問の反対です。
学問の少しある人も、もっと学問すると、自分がいかに愚かであるかということが次第にわかってくるのであり、それが本当に学問ができた証拠でもあります。

いくらわかったと思っても、結局わかっていないのが人間の智慧というものです。
賢者ではなく愚者であることを自覚できるようになってこそ、はじめて自力がすたり、本願他力が

信じられて、念仏が喜ばれるようになるのです。
ところが私たち凡夫は自己の愚かさに気づかず、他力の救済を信じないで、智にばかり走って、わかったような気になり、ついには名聞利養の心になり、本願が信じられず、念仏も喜ばれないことになってしまうのです。

仏教は本来、智慧の獲得をめざす宗教なのに、愚者になる仏道とは、なんと逆説的な表現でしょうか。
煩悩を抱えたまま浄土へ往生して、智慧と慈悲の仏となるのであり、煩悩はそのまま智慧へと転換するのです。
親鸞聖人は煩悩と悟りを氷と水の関係にたとえられ、煩悩の氷が溶けて菩提の水となる、と言われました。
「無礙光の利益より　威徳広大の信をえて　かならず煩悩のこほりとけ　すなはち菩提のみづとなる」（「高僧和讃」）
（現代語訳）
〈阿弥陀仏の無礙光のはたらきにより、広大ですぐれた功徳をそなえた信心を得ることで、必ず煩悩の氷が溶けて、さとりの水となるのです。〉

◎妙好人・讃岐の庄松と島根の浅原才市

学問がなくて社会的な地位が低いにもかかわらず、本当の信仰を持っている篤信の人々を、浄土真宗では「妙好人」と呼んでいます。

讃岐（香川県）の庄松（1799-1871）という人は、字の読めない無学な農民でしたが、信心深いことで人々に一目置かれていました。
それを面白く思わない人から、庄松はある時意地悪をされて『無量寿経』を読んでみろと言われ、お経本をわざと上下逆さまに渡されます。それをそのまま受け取った彼は、「庄松を助けるぞよ、庄松を助けるぞよ」と読んだといいます。たとえ経典の文字は読めなくても、阿弥陀仏が庄松を助けようとする本願が書かれているという本質を、彼は見事に言い切ったのです。

また島根の浅原才市（1850-1932）という人は、船大工を経て晩年は下駄職人で、学問はありませんでしたが 20 年余りお聴聞を続け、1 万首近くの素晴らしい詩を残しました。下駄を削ったカンナ屑に詩を書き止め、それをノートに書き写したといわれます。鈴木大拙先生が才市の詩の素晴らしさを発見して、世界的に紹介されました。彼の詩は浄土真宗の救いを如実に表現したものといえるでしょう。

以下は才市の念仏詩の一部です。

「ええな　せかいこくう（世界虚空）がみなほとけ　わしもそのなか　なむあみだぶつ」
「わたしゃ　りん十（臨終）すんで　葬式すんで　浄土に心住ませてもろうて　なむあみだぶと浮世におるよ」
「死ぬること　まよいなり　死なんは　浄土なり　これがたのしみ　なむあみだぶつ」
「才市やどこにおる　浄土もろうて娑婆におる　これがよろこび　なむあみだぶつ」
「才市　極楽どこにある　こころにみちて　身にみちて　なむあみだぶつが　わしが極楽」
「わたしゃ浄土を先に見て　娑婆で申すなむあみだぶつ」

浅原才市は読み書きが少しだけできましたが、ひらがなの多い、たどたどしいともいえるような言葉で、信心のよろこびを書き残しました。

◎前念命終　後念即生―信に死し願に生きよ

才市が「りん十すんで　葬式すんで　浄土に心住ませてもろうて」「死ぬること　まよいなり　死なんは　浄土なり」と書き記したのは、親鸞聖人の『愚禿鈔』のお言葉を連想させます。

●『愚禿鈔』

「本願を信受するは、前念命終なり。即ち正定聚之数に入る。
即得往生は、後念即生なり。即時に必定に入る。又必定の菩薩と名くる也。」

「正定聚」というのは、まさしく浄土に往生することが定まっていることです。

（現代語訳）
〈本願を信じて拝受するのは、念仏によって、これまで生きてきた自力の命が終わることです。（すなわち正定聚の数に入ることです。）
信心を得た者がたちどころに往生を得るというのは、念仏によって、たちどころに往生が決定されるという意味です。（即時に必ず正定聚に入るのです。また、必ず正定聚に入った菩薩と名づけるのです。）

信心を得て念仏することによって、それまでの自力の命が死んで終わり、即得往生することによって新たな生を得て、浄土に往生することが定まるのです。
自力に死んで他力に生きるのであり、これを曽我量深師は「信に死し、願に生きよ」と言われまし

た。死して生きるということです。
「仏法を聞くことは、自分の葬式をさせていただくことだ」と言った方がおられます。
自力のはからいや自我分別心と決別して、葬式をするのです。
自分でさとる力も、学問もないごく普通の人たちでも、阿弥陀仏の本願を信じて念仏するだけで救われるのであり、浅原才市の詩を読むと、それがよく伝わってきます。

今日はこのへんにしたいと思います。
次回は 7 月 13 日土曜日のお盆法要の際に、この続きをお話したいと思います。
ご清聴ありがとうございました。